弓　道　同　好　会

沿　　革

「幕別体育連盟20周年のあゆみ」が発刊されたのが、つい昨日のように思えたのに、30年誌を発行するとの連絡に、月日の経つのの早いのに驚いている次第です。

再度、弓道同好会の沿革より記すことと致します。

幕別弓道同好会は、幕別体連発足に遅れること18年、昭和51年４月に加盟し、その歴史は浅い。しかし、当町における弓道の歴史は可成り古くから愛好した方々がおり、種々活動されたそうであります。

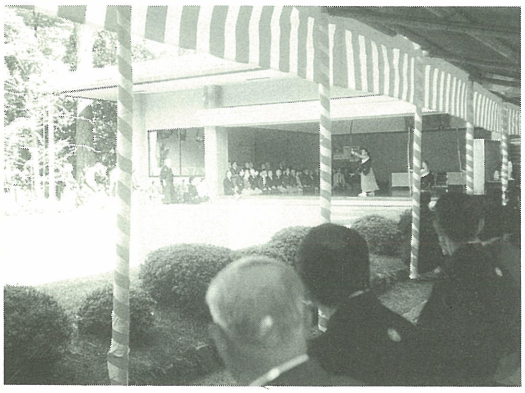
明治、大正時代においては、各町村毎の団体組織はなかったようで、十勝では帯広地区に弓道場があり、また指導者も専ら帯広を中心に在住し、各種大会が開催されたそうです。

その頃、幕別の弓道愛好者は、かつて市街の中心が猿別地区にあった頃、猿別の金比羅神社境内に稽古場を設け、また祭典奉納射会も常に開催されました。

明治38年に鉄道が開通し止若駅が開設され、幕別の市街地も現在の様相を呈し、弓道の愛好者も、現在の幕別神社の境内に稽古場を設け、十勝管内の同好者の参加を得て幕別神社の祭典奉納射会等を開催し盛会でありました。

昭和20年太平洋戦争の終結とともに連合軍指令に基づく、日本武道の禁止により弓道も衰微し、幕別神社祭典奉納射会場も、今は止若公園となっている。

終戦とともに、解散した武道団体に遂次復活し昭和22年春、中央においては全日本弓道連盟が結成され、本年５月には京都武徳殿が竣工し、落成祝射会にも参加の機会を得て感激も新たにしました。十勝においても昭和27年４月10日、十勝地区弓道連盟（初代会長　林善威氏）が発足し、池田・本別・足寄・音更・士幌・鹿追・芽室・中札内・清水・帯広の各市町村に支部が発足した。しかし幕別町は、戦前、弓道を愛された方々は、今は既に故人となられ現在は尋ねるすべもなく、他町村より移住した弓道の同好者故人により、幕別弓道同好会を結成している現状あります。

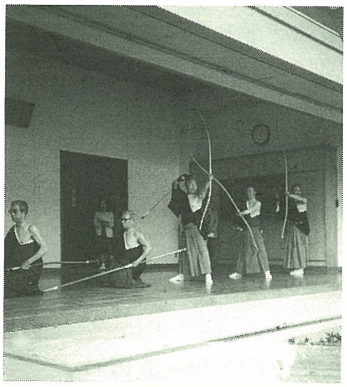


現　　況

幕別町の人口も、今や２万１千人を越え、特に札内地区は帯広市のベットタウンとして栄え、本町地区を凌ぐ人口の増加である。それに伴いスポーツ人口も増え、益々活発化してきた。

このなかにあって弓道は、鈴木攻一（当時帯広第一中学校）が札内春日団地開設と同時に帯広市内から転入（本年中里小学校教頭に栄転）名実共に幕別地区弓道同好会会員となり、また池畠多加一郎（当時帯広営林局～開発局～同退職）が昭和45年秋、帯広市から札内地区に転居し、僅か２名ながら帯広弓道場に通う毎日であった。その後昭和49年には、阿部寛司（札内郵便局が、足寄町から町内札内地区に転入し漸やくにして弓道競技の最少基準団体として各種大会に参加できるようになった。しかし、幕別町としての単位団体の組織は、弓道場がないため専ら帯広弓道協会の会員として負担金を納め、稽古に励み、各種大会、講習会等に参加した。そして十勝管内で開催される道民スポーツ大会等市町村対抗弓道大会にのみ、帯広弓道協会の会員でありながらも、幕別チームを編成し参加したのである。

特に道民スポーツ夏季大会には、昭和50年度第７回大会にはじめて幕別町として参加したのであります。明けて昭和51年春には、加藤哲夫（東京海上火災保険帯広支社）が幕別南町に転入、この頃漸やくにして形も整ったことから規約を設定し、幕別弓道同好会を結成し、幕別体育連盟に単位団体として加した。その後千葉寿（十勝支庁）、門屋宏（帯広第四中学校）を当町に迎え一段と要員の充実をみた。しかし弓道は、常に稽古に励み、心身を鍛練しなければならない。幕別町に弓道場が建設されるまでは、引続き帯広弓道協会に籍を置き、帯広市緑ケ丘市営弓道場で修練に励んでいるところであります。



現在の活動状況

(1)　各種競技大会

幕別弓道同好会の会員は、個人として全道大会、東北海道大会、全十勝大会等に参加し、数々の入賞記録はあるが、団体としての参加は全十勝市町村対抗射会、道民スポーツ夏季大会である。そのうち入賞記録は次のとおりである。

昭和51年８月１日　第９回道民スポーツ十勝夏季大会　遠的の部　２位

昭和52年８月21日　第23回全十勝弓道選手権大会　　団体　優勝

昭和53年７月31日　第10回道民スポーツ十勝夏季大会　近的の部　優勝、団体総合２位
昭和61年８月　日　第18回道民スポーツ十勝夏季大会　団体総合　優勝
（１位　阿部寛司、２位　坂本龍也、３位　加藤哲夫）

(2) 弓道の修練と指導

スポーツの殆どが動的であるのに対し、弓道はきわめて静的であり、いわゆる静中に動を求める運動である。従って、厳しい自己統制と情緒の安定が要求される。

元来、弓矢は原始な単純かつ素朴な用具で、これを操作して固定された的を射るのであるから、わずかの動揺があっては、目的を達することはできない。いわゆる不動の的を射るのであるから、不中の場合、欠陥があるとすれば常に自己にある。

的に心をとらわれてはならないのである。

また射は、仁なりといい、常に礼に即した射でなければならない。従ってわれわれは、正しい道を修めるため、また会員はもとより弓道を志す者に対する指導のためにも自らも修練しなければならない。

全日本弓道連盟では、毎年各地区の指導的立場にある称号変更有者を集め、講習会を実施している。その他各地域、地区に於いてもそれぞれ講習会が実施され、本年度帯広地区弓道教室が５月～６月に亘り開催され、幕別同好会員となられた門屋宏も教室の一員である。

(3) 弓道の段級審査民

弓道は、正しい弓射の指導と普及を目的として、毎年弓道の段級審査が実施されるが、特に中央審査は全日本弓道連盟の審査委員が中央から出張して来られ、指導の修練の適否を審査する。また、これを基礎として指導者は正しい指導と普及に務め、或いは会員の審査に当たっている。

〈本年度昇段者氏名〉

加藤　哲夫	６段	京都中央審査	５月７日実施
門屋　　宏	初段	帯広地方審査	10月18日実施

(4) 幕別弓道同好会　役員

〈事務局〉

幕別町南町２―29　　加藤哲夫宅　　電話　0155－54－3716

〈役　員〉

会　　長	不在（昭和62年10月15日死亡）	
理 事 長	加藤　哲夫	南町２―29
理　　事	阿部　寛司	札内あかしや町43
	坂本　龍也	札内文京町33―71
監　　事	鈴木　政一	札内泉町79―32

展　　望

日本武道は、礼に始まり礼に終わる、と言われるが、特に弓道にあっては「射は進退周還必ず礼に中り、内志正しく外体直くして、然る後に弓矢を持ること審固なり」と言われ、起居進退、すべて礼に即さなければならない。

また弓射は、小笠流を中心としていろいろなまつりごとに用いられる。

最近の思い出として、先輩諸先生のお話を聞く度に、一度は行って見たいと思っていた。弓道の殿堂、京都武徳殿が装いも新たに完成し、その祝射会に北海道東部地連代表の一員として参加の栄を得、斉藤友治全日弓連会会長による矢渡し式、鴨川信之全日矢連副会長による四方詰の儀を見る機会にめぐまれた。

これらの儀式は、弓道場が建設された際行われるが、中央の大先生による荘重にして華麗な緒作は弓道人はもとより、一般見学者をも魅了し水をうったような静けさであります。

この感激はいつまでも終生忘れる事はないでしょう。

現在、町内には弓道場がなく、専ら帯広市の弓道場を利用しているが将来は町当局の理解を得て、町内に道場を設けわれわれの修練の場とし、また弓道教室の開催、各種大会の誘致に努め、町内弓道人口の増加を図り、弓道の普及と発展に努めたい。